

公益財団法人図書館振興財団

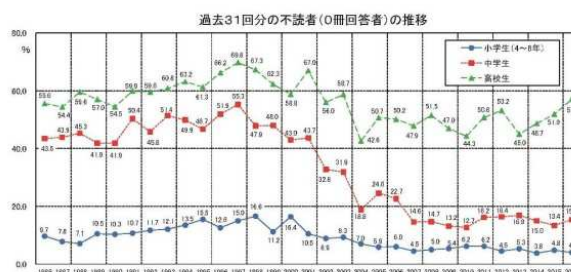
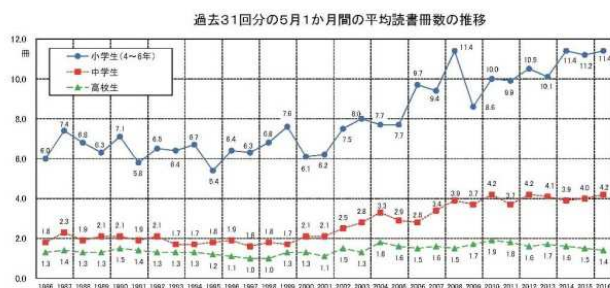
第17回 子どもの本 この1年を振り返って 2016年 ブックリスト

■ヤングアダルトの部■

全国SLA学校図書館スーパーバイザー 高見 京子

■今、「若者」(高校生)がトレンド

- ・2016年—学校図書館年
- ・高校生直木賞 高校生ビブリオバトル全国決選、中学生決選
- ・映画「君の名は。」の大ヒット
- ・18歳選挙権
- ・「若者の『読書離れ』」ということについて
- ・つなぐ役割の重要性



(参照 全国学校図書館協議会「第 62 回学校読書調査」の結果) 調査者:全国学校図書館協議会・毎日新聞社)

■同世代の共感(フィクション中心)

- ・イチオシ
- ・中学生
- ・高校生
- ・ノンフィクション

■授業との関連や発展

- ・各教科別に(理科・社会・英語・保健・国語)

■教養(入門書)として

- ・大人から若者へ(憲法・政治)社会状況・哲学・服飾・戦争

■人生を考える

- ・進路・伝記・悩み・生き方

■話題の本

- ・文学賞受賞作品・若者の好きな作家等

■同世代の共感

★	高	『i』/西 加奈子・著/ポプラ社/2016. 11/¥1500/(913. 6)
★	高	『蜜蜂と遠雷』/恩田 陸・著/幻冬舎/2016. 9/¥1800/(913. 6)
★	中	『メディチ家の紋章』(Sunnyside Books)/テリーザ・ブレスリン・作, 金原 瑞人ほか・訳/小峰書店/2016. 2/¥2000/(933. 7)
★	中	『世界一のランナー』/エリザベス・レアード・作, 石谷 尚子・訳/評論社/2016. 1/¥1450/(933. 7)
	中	『レイン 雨を抱きしめて』(Sunnyside Books)/アン・M.マーティン・作, 西本 かおる・訳/小峰書店/2016. 10/¥1500/(933. 7)
	中・高	『ペーパーボーイ』(STAMP BOOKS)/ヴィンス・ヴォーター・作, 原田 勝・訳/岩波書店/2016. 7/¥1700/(933. 7)
★	中・高	『花が咲くとき』/乾 ルカ・著/祥伝社/2016. 3/¥1600/(913. 6)
★	高	『また、同じ夢を見ていた』/住野 よる・著/双葉社/2016. 2/¥1400/(913. 6)
	高	『よるのばけもの』/住野 よる・著/双葉社/2016. 12/¥1400/(913. 6)
★	中	『いい人ランキング』/吉野 万理子・著/あすなろ書房/2016. 8/¥1400/(913. 6)
★	中	『きみの声を聞かせて』/小手鞠 るい・著/偕成社/2016. 10/¥1400/(913. 6)
	中	『X-01』(YA! ENTERTAINMENT)/あさの あつこ・[著]/講談社/2016. 9/¥950/(913. 6)
★	中	『庭のマロニエ アンネ・フランクを見つめた木』(評論社の児童図書館・絵本の部屋)/ジェフ・ゴッテスフェルド・ぶん, ピーター・マッカーティ・え, 松川 真弓・やく/評論社/2016. 6/¥1300/(絵本)
★	高	『アウシュヴィッツの図書係』/アントニオ・G.イトウルベ・著, 小原 京子・訳/集英社/2016. 7/¥2200/(963)
	中	『Q→A』/草野 たき・著/講談社/2016. 6/¥1400/(913. 6)
	中	『なりたて中学生 上級編』/ひこ・田中・著/講談社/2016. 10/¥1500/(913. 6)
	中	『天と地の方程式 3』/富安 陽子・著/講談社/2016. 3/¥1400/(913. 6)
★	中	『翼もつ者』(文学のピースウォーク)/みお ちづる・作/新日本出版社/2016. 7/¥1800/(913. 6)
	中	『少年たちの戦場』(文学のピースウォーク)/那須 正幹・作/新日本出版社/2016. 5/¥1800/(913. 6)
★	中・高	『君の名は。』(角川つばさ文庫)/新海 誠・作/KADOKAWA/2016. 8(「小説君の名は。」(角川文庫 2016年6月刊)の改題)/¥680/(913. 6)
★	高	『この青い空で君をつつもう』/瀬名 英明・著/双葉社/2016. 10/¥1500/(913. 6)
★	高	『ジニのパズル』/崔 実・著/講談社/2016. 7/¥1300/(913. 6)

★	中・高	『フラダン』(Sunnyside Books)/古内 一絵・作/小峰書店/2016. 9/¥1500/(913. 6)
★	高	『世界が終わる前に』(BISビブリオバトル部)/山本 弘・著/東京創元社/2016. 2/¥1800/(913. 6)
	中・高	『誰がために鐘を鳴らす』/山本 幸久・著/KADOKAWA/2016. 2/¥1600/(913. 6)
	中	『さくら坂』(Sunnyside Books)/千葉 朋代・作/小峰書店/2016. 6/¥1400/(913. 6)
	中・高	『空はいまぼくらふたりを中心に』/村上 しいこ・著/講談社/2016. 8/¥1500/(913. 6)
	中・高	『ラジオラジオラジオ！』/加藤 千恵・著/河出書房新社/2016. 6/¥1300/(913. 6)
	中・高	『「悩み部」の成長と、その緊張。』(「5分後に意外な結末」シリーズ)/麻希 一樹・著/学研プラス/2016. 7/¥1000/(913. 6)
	中・高	『いまさら翼といわれても』(＜古典部＞シリーズ)/米澤 穂信・著/KADOKAWA/2016. 11/¥1480/(913. 6)
	中・高	『表参道高校合唱部！ 3 10000回だめでへとへとになっても』(部活系空色ノベルズ)/櫻井 剛・脚本, 桑畑 絹子・小説/学研プラス/2016. 6/¥1300/(913. 6)
	中・高	『名もなき風たち サッカーボーイズU-16』/はらだ みずき・著/KADOKAWA/2016. 10/¥1400/(913. 6)
	中・高	『車夫 2 幸せのかっぱ』(Sunnyside Books)/いとう みく・作/小峰書店/2016. 11/¥1600/(913. 6)
★	高	『モンスーンの贈りもの』(鈴木出版の児童文学)/ミタリ・パーキンス・作, 永瀬 比奈・訳/鈴木出版/2016. 6/¥1600/(933. 7)
★	中・高	『エベレスト・ファイル シェルパたちの山』/マット・ディキンソン・作, 原田 勝・訳/小学館/2016. 3/¥1500/(933. 7)
★	中・高	『ノベルダムと本の虫』/天川 栄人・著/KADOKAWA/2016. 2/¥1200/(913. 6)
★	中・高	『16歳の語り部』/雁部 那由多ほか・語り部/ポプラ社/2016. 2/¥1300/(369. 31)

■授業との関連や発展させるもの

★	高	『生命の始まりを探して僕は生物学者になった』(14歳の世渡り術)/長沼 毅・著/河出書房新社/2016. 7/¥1300/(460)
★	中・高	『面白くて眠れなくなる元素』/左巻 健男・著/PHPエディターズ・グループ/2016. 7/¥1400/(431. 11)
★	中・高	『14歳のための宇宙授業 相対論と量子論のはなし』/佐治 晴夫・著/春秋社/2016. 7/¥1800/(421. 2)
	中・高	『笑う免疫学 自分と他者を区別するふしぎなしくみ』(ちくまプリマー新書)/藤田 紘一郎・著/筑摩書房/2016. 1/¥780/(491. 8)
★	中・高	『ダーウィンと旅して』/ジャクリーン・ケリー・作, 斎藤 倫子・訳/ほるぷ出版/2016. 8/¥1500/(933. 7)
★	中・高	『おもしろ実験研究所』/高見 寿・監修/山陽新聞社/2016. 5/¥1000/(407)

★	中・高	『世界甲虫大図鑑』/パトリス・ブシャー・総編集, 丸山 宗利・日本語版監修, 伊藤 伸子・ほか訳/2016. 5/¥6500/(R486. 6)
★	高	『中谷宇吉郎 雪を作る話』(STANDARD BOOKS)/中谷 宇吉郎・著/平凡社/2016. 2/¥1400/(404)
★	中・高	『地図がわかれば社会がわかる』/田代 博・著/新日本出版社/2016. 7/¥1700/(448. 9)
	中・高	『国際情勢に強くなる英語キーワード』(岩波ジュニア新書)/明石 和康・著/岩波書店/2016. 3/¥800/(834)
	中・高	『楽しく習得！英語多読法』(ちくまプリマー新書)/クリストファー・ベルトン・著, 渡辺 順子・訳/筑摩書房/2016. 7/¥860/(830. 7)
★	中・高	『LGBTなんでも聞いてみよう 中・高生が知りたいホントのところ』/QWRC・著/子どもの未来社/2016. 8/¥1300/(367. 9)
★	中・高	『姜尚中と読む夏目漱石』(岩波ジュニア新書)/姜 尚中・著/岩波書店/2016. 1/¥800/(910. 268)
	中・高	『大人になるまでに読みたい15歳の短歌・俳句・川柳 3 なやみと力』/なかはら れいこ・編/ゆまに書房/2016. 3/¥1500/(911. 08)
	中・高	『学校では教えてくれないゆかいな日本語』(14歳の世渡り術)/今野 真二・著/河出書房新社/2016. 8/¥1300/(810)
★	中・高	『新聞力 できる人はこう読んでいる』(ちくまプリマー新書)/齋藤 孝・著/筑摩書房/2016. 10/¥780/(070)
★	中・高	『研究するって面白い！ 科学者になった11人の物語』(岩波ジュニア新書)/伊藤 由佳理・編著/岩波書店/2016. 10/¥820/(402. 106)

■教養(入門書として)

★	中・高	『憲法と君たち 復刻新装版』/佐藤 功・著/時事通信出版局/2016. 10(初版: 牧書店 1955年刊)/¥1200/(323. 14)
★	高	『18歳からの民主主義』(岩波新書)/岩波新書編集部・編/岩波書店/2016. 4/¥840/(311. 7)
	中・高	『学校が教えないほんとうの政治の話』(ちくまプリマー新書)/斎藤 美奈子・著/筑摩書房/2016. 7/¥820/(310)
	中・高	『投票に行きたくなる国会の話』(ちくまプリマー新書)/政野 淳子・著/筑摩書房/2016. 6/¥820/(314. 1)
	中・高	『はじめて投票するあなたへ、どうしても伝えておきたいことがあります。』/津田 大介・監修, ブルーシープ・編集/ブルーシープ/2016. 6/¥1400/(379. 4)
	中・高	『転換期を生きるきみたちへ 中高生に伝えておきたいたいせつなこと』(犀の教室)/内田 樹・編, 岡田 憲治ほか・著/晶文社/2016. 7/¥1400/(304)
	中・高	『これからの世界をつくる仲間たちへ』/落合 陽一・著/小学館/2016. 4/¥1300/(007. 3)
	中・高	『新しい地図の見つけ方』/宇野 常寛ほか・著/KADOKAWA/2016. 9/¥1200/(159. 7)
★	中・高	『はじめての哲学』/石井 郁男・著/あすなろ書房/2016. 2/¥1400/(130)
★	高	『谷崎潤一郎文学の着物を見る 耽美・華麗・悪魔主義』(らんぷの本)/大野 らふほか・編著/河出書房新社/2016. 3/¥1900/(910. 268)

★	高	『ブラックバイト 学生が危ない』(岩波新書)/今野 晴貴・著/岩波書店/2016. 4/¥820/(377. 9)
	高	『ルポ貧困女子』(岩波新書)/飯島 裕子・著/岩波書店/2016. 9/¥820/(367. 21)
	高	『下り坂をそろそろと下る』(講談社現代新書)/平田 オリザ・著/講談社/2016. 4/¥760/(304)
★	高	『アウシュヴィッツの囚人写真家』/ルーカ・クリッパ・著, マウリツィオ・オンニス・著, 関口 英子・訳/河出書房新社/2016. 2/¥2600/(973)
★	高	『戦争まで 歴史を決めた交渉と日本の失敗』/加藤 陽子・著/朝日出版社/2016. 8/¥1700/(210. 7)

■人生を考える

★	中・高	『ぼくは君たちを憎まないことにした』/アントワーヌ・レリス・著, 土居 佳代子・訳/ポプラ社/2016. 6/¥1200/(956)
★	中・高	『司書になるには』(なるにはBOOKS)/森 智彦・著/ペリかん社/2016. 10/¥1500/(013. 1)
	中・高	『銀行で働く人たち しごとの現場としくみがわかる!』(しごと場見学!)/小堂 敏郎・著/ペリかん社/2016. 3/¥1900/(338. 51)
★	中・高	『石井桃子 児童文学の発展に貢献した文学者』(ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉)/筑摩書房編集部・著/筑摩書房/2016. 1/¥1200/(910. 268)
	中・高	『武満徹 現代音楽で世界をリードした作曲家』(ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉)/筑摩書房編集部・著/筑摩書房/2016. 1/¥1200/(762. 1)
★	高	『夜を乗り越える』(小学館よしもと新書)/又吉 直樹・著/小学館/2016. 6/¥820/(910. 26)
	中・高	『思春期サバイバル 2 10代のモヤモヤに答えてみた。』/ここから探検隊・制作/はるか書房/2016. 4/¥1400/(371. 47)
★	中・高	『心にひびくマンガの名言 第2期1 人生の大切なことはマンガがすべて教えてくれる 困難を乗り越える』/学研プラス/2016. 2/¥3000/(159. 8)
★	中・高	『シャクルトンの大漂流』/ウィリアム・グリル・作, 千葉 茂樹・訳/岩波書店/2016. 10/¥2000/(絵本)
★	中・高	『このあとどうしちゃおう』/ヨシタケ シンスケ・作/ブロンズ新社/2016. 4/¥1400/(絵本)

■話題の本

★	中・高	『ハリネズミの願い』/トーン・テレヘン・著, 長山 さき・訳/新潮社/2016. 6/¥1300/(949. 33)
★	中・高	『文豪ストレイドッグス 4 55Minutes』(角川ビーンズ文庫)/朝霧 カフカ・著/KADOKAWA/2016. 10/¥600/(913. 6)
★	高	『ツバキ文具店』/小川 糸・著/幻冬舎/2016. 4/¥1400/(913. 6)
★	高	『アンマーとぼくら』/有川 浩・著/講談社/2016. 7/¥1500/(913. 6)

中・高	『コンビニ人間』/村田 沙耶香・著/文藝春秋/2016. 7/¥1300/(913. 6)
高	『暗幕のゲルニカ』/原田 マハ・著/集英社/2016. 3/¥1600/(913. 6)
高	『十二人の死にたい子どもたち』/沖方 丁・著/文藝春秋/2016. 10/¥1550/(913. 6)
高	『夜行』/森見 登美彦・著/小学館/2016. 10/¥1400/(913. 6)
高	『みかづき』/森 絵都・著/集英社/2016. 9/¥1850/(913. 6)
高	『何様』/朝井 リョウ・著/新潮社/2016. 8/¥1600/(913. 6)
高	『陸王』/池井戸 潤・著/集英社/2016. 7/¥1700/(913. 6)
高	『中野のお父さん』/北村 薫・著/文藝春秋/2015. 9/¥1400/(913. 6)
高	『浮遊』/高嶋 哲夫・著/河出書房新社/2016. 3/¥1500/(913. 6)
中・高	『ハリー・ポッターと呪いの子 第一部・第二部』(『「ハリー・ポッター」シリーズ』)/J. K. ローリング・ほか著, 松岡 佑子・訳/静山社/2016. 11/¥1800/(932. 7)
中・高	『翻訳できない世界のことば』/エラ・フランシス・サンダース・著・イラスト, 前田 まゆみ・訳/創元社/2016. 4/¥1600/(804)
中・高	『自転車で見た三陸大津波 防潮堤をたどる旅』/武内 孝夫・著/平凡社/2016. 2/¥1800/(291. 2)
中・高	『3. 11を心に刻んで 2016』(岩波ブックレット)/岩波書店編集部・編/岩波書店/2016. 3/¥780/(369. 31)
中・高	『アリスのうさぎ ビブリオ・ファンタジア』/齊藤 洋・作/偕成社/2016. 8/¥1300/(913. 6)
高	『アンと青春』/坂木 司・著/光文社/2016. 3/¥1600/(913. 6)

公益財団法人図書館振興財団
第17回 子どもの本 この1年を振り返って 2016年 講演録
■ヤングアダルトの部■

講演：全国SLA学校図書館スーパーバイザー 高見 京子

みなさん、こんにちは。高見京子と申します。私は高校の国語教師・司書教諭として高校生の読書指導に携わってきました。38年間、高校生の心に響く本を手渡していきたいと努めて参りました。よって、ご紹介する本が高校生や学校図書館寄りになっているかもしれません。図書リストの作成にあたり、私の周りの中学校、高校、図書館の方々など様々なご意見も参考とさせていただきます。図書リストの対象の「中」は小学校高学年から読める本、「中高」はYA向け、「高」は一般向けだがYA対象とも言えると私が判断した本です。

■今、「若者」がトレンド

世の中が今、若者に注目しだしたという印象があり、私自身「若者がトレンド」と捉えています。

2016年は「学校図書館年」でした。学校図書館世界大会が東京で開催され(注1)、その中、英語でビブリバトルを行った高校生たちも注目されました。「高校生直木賞」が3回目を迎えるほか、全国高等学校ビブリオバトルも3年目となり、中学選抜大会も始まりました(注2)。

また映画「君の名は。」(監督：新海誠、2016年公開)が大ヒットし、その背景には大人の若者に対する目や思春期の瑞々しい感性への大人の共感があったと思います。部活動小説は運動部文化部を問わず、ほとんどの部が紹介できるほどに出版されています。18歳からの選挙参加も始まり、中高校生を対象とした政治や社会に対する関心を高めるための教育や書籍にも注目が寄せられるようになりました。YA図書の状況は随分豊かになってきたと感じます。

ただ、中高校生への理解は世間的にはまだ弱いという印象があり、「いじめ」といった問題や、良くて「甲子園」のような話題ばかりが注目され、「学んで」「考える」、普通の高校生の姿はあまり知られていないのではという思いが常にありました。

また、度々話題に上がる「若者の『読書離れ』」は、世間で言われるほどではありません。レジュメにも全国読書調査の統計グラフを載せました(注3)。よく高校生は、1カ月に2冊も本を読まない、半分の生徒は1カ月に1冊も読んでいないと言われます。しかし30年間を通して見ると、読書量は小学生・中学生では増えているのです。高校生の場合は、増えてはいないが減ってもいない「横ばい」です。また不読率についてはピーク時である20年程前(69.6%)と比べると、減少していることが分かります。そもそも中高校生の立場から言えば、小学生と中高校生では1冊にかかる時間が違います。統計的に見れば中高校生は本が好き、しかし「何を読んでいいかわからない」「時間がない」といった声もある中、若者たちと本とをつなげる人の存在は大切であると思います。等身大の若者を見、信じ、活動してきたいものです。

■同世代の共感

『i』は、高校1年生のアイが出席している数学の授業で、教師が「この世界にアイは存在

しません。」(p. 3)と言うところから物語が始まります。アイはシリア人で、アメリカ人と日本人夫婦の養子として豊かに愛情深く育てられますが、自分だけが幸せでいいのだろうかと悩みます。彼女は、世界のテロや災害で亡くなった人の数をずっと記録していきます。「i (=私)は何か」という問いかけの中、世界情勢や友情・恋愛もからめ、情感たっぷりに少女から大人への成長が語られます。自己を求め続けている若者に薦めたい小説です。

『[蜜蜂と遠雷](#)』。登場人物は16歳から28歳の4人の若者です。国際ピアノコンクールが舞台となっています。ページをめくると4人の弾いた曲名も書かれています。物語は第一次予選前から始まりますが、コンクールを通して彼ら彼女らが変わっていきます。読んでみると音楽が聞こえてきて、そこから醸し出される思いをこんなにも言葉で表現できるのかと思います。世の中はこんなに美しい。それが人との関わりと絡まり合い、ダイナミックにストーリーが進んでいきます。感受性の鋭いこの時期に、この小説に触れてほしいと思いました。主人公たちの年齢が小学生から高校生までとなっており、登場人物の年齢と読者の年齢が重なっている訳ではありませんが、小学校から高校までの気持ちも多く書かれており、「同世代の人たちがこんなことを考えている」という気づきのきっかけになるのではと思いました。

小学生くらいの年頃の子が登場する話で、とても面白かったのが『[メディチ家の紋章](#)』。舞台は16世紀のイタリア。貧しい生活の中、主人公のマッテオという少年はあるものを盗み、逃亡の中、ダ・ヴィンチに救われます。マッテオがメディチ家とどのように関わっていくのか、彼はなぜ追われるのか、ダ・ヴィンチとの関係はどうなのか。最後まで謎は残されたまま、壮絶な戦いや悲しい別れが続き、ワクワクドキドキしながら一気に読み進められます。自立心の強い生意気なマッテオが魅力的です。まるで映画「ダ・ヴィンチコード」(原作：ダン・ブラウン、監督：ロン・ハワード、2006年公開)少年版のような小説でした。16世紀のイタリアについて、また学ぶということについても考えさせられる小説でした。

『[世界のランナー](#)』。エチオピアの田舎町に住んでいるソロモンは走るのが大好きな11歳の少年です。ある時、おじいさんの用事について大都会のアディスアベバに出かけます。見るもの聞くもの全て珍しく興味津々ですが、そんな中おじいさんが急病で倒れてしまいます。そしてソロモンは、故郷へ知らせに35キロを命がけで走るのです。途中おじいさんの過去を知ったりと、ソロモンの視点で書かれ、彼と一緒に泣いたり笑ったりしながら読み進められます。家族のために一生懸命に走る、ソロモンのひたむきな想いがよく描かれた作品でした。

『[花が咲くとき](#)』。反抗期真っ盛りの小学6年生の男の子、瀬川大介君は隣のおじいさんが旅に出ることを機会に、誰にも内緒でおじいさんの後を追う形で家出をします。そして、あちこち旅を続ける中、おじいさんがシベリアに抑留されていたこと知ります。生死の極限状態の中で仲間裏切られたことへの憎しみ・復讐の心は、赦し超えることができるか。大介は、おじいさんと彼に関わった人間との関係を取り持つ形になりつつ、自身が学び成長していきます。タイトルの意味は最後に明かされます。私たちが戦争や過去を振り返る良いきっかけになる小説です。

『また、同じ夢を見ていた』。『君の臍臓をたべたい』（双葉社、2015年刊）で若者の圧倒的な支持を受けた、住野よるさんの第2作目の作品です。主人公は小学5年生の女の子。学校で「『幸せ』とは何かを考えてみよう」という宿題を出され、それを追い求めていく物語です。近所のアパート暮らしのアバズレさん、屋上で1人たたくむ高校生の南さん、1人暮らしのおばあちゃんとの出会い、そして彼女らとの触れ合いの中で、主人公は色々なことに気づいていきます。この子は謎かけが好きで「人生はプリンみたいなものってことね」「甘いところだけで美味しいのに、苦いところをありがたがる人もいる」（p. 13）なんてことを言う、ちょっとおませな女の子です。最後には「やはり住野さん」とも言うべきどんでん返しもあります。

続いて中学校のいじめの話、『いい人ランキング』です。ダメな人をいじめるのではなく、「いい人」をいじめる。ここでの「いい人」とは、人の悪口を言わない、掃除はサボらない、宿題を見せてと頼まれたら気前よく見せる人。主人公の桃も「いい人」と言われているので最初は気づきませんが、次第に気持ちが追い込まれていきます。ただ、いじめの実態を描くだけでなく対処方法も描かれ、最後は少し清々しさもあるので、後味は悪くありません。

『きみの声を聞かせて』。小手鞠るいさんによる作品です。中学生の失語症の少女と、アメリカに住む視覚障害者であるピアノ弾きの少年カイトによる、ネットを通じての心の交流の物語です。失語症になるということはそれだけ辛い思いを抱えていることを意味しますが、「蜜蜂と遠雷」同様、音楽などを介することで、また心の通い合いによって2人の心が浄化されていく様子を描いています。加えて少女の書く詩や、少年の朗読ボランティアをしている母親が語る新美南吉の「でんでんむしのかなしみ」といった詩が作品に深みを持たせ、少年少女の切ない恋の物語を描く素敵な作品となっています。

次に『庭のマロニエ』。アンネ・フランクの隠れ家の裏庭に植えられていたマロニエが、アンネを見つめていたという形をとった絵本です。アンネが隠れ家でどのように過ごしていたか、その様子が分かります。アンネが去った後もマロニエの木は残りますが、2010年強風に吹き倒され、その種や苗木は、平和と自由の象徴としてニューヨークのツインタワーの跡地をはじめ、世界各国で育てられているそうです。日本ではホロコースト記念館（広島県福山市）など3カ所で大切に育てられています。「アンネの日記」は、ホロコーストのことを知ってほしいということと同時に、13歳の少女があれだけ自身の気持ちをよく表現している作品が他にあまりないこともあり、ぜひ一緒に紹介していただきたいと思います。

『アウシュヴィッツの図書係』もホロコーストの話です。アンネも少しですが登場します。アウシュヴィッツ・ビルケナウには図書館があった。学校があった。そして家族収容所もあった。これらはナチスに知られないよう密かに作られたものです。「厳しい監視下にあったにもかかわらず、そこには秘密の図書館があった。～中略～彼女の仕事はそれらの本を毎晩違う場所に隠すことだった」（p. 6（ページ番号なし））主人公はディタという14歳の少女ですが、実在の人物がモデルとなっており、本作はインタビュー等を通じて小説化されたものです。収容所のような場所においても、本とは人に想像させること、未来を考えさせること、そんなことを成し得るのものなのだと考えさせられる本でした。

『翼もつ者』。日本児童文学者協会によって企画された「文学のピースウォーク」シリーズの1冊です。私たちは「翼」を自由の象徴として捉えていますが、この物語は実際に翼を持っていた人々が登場します。翼を奪われてしまった少年たちがそれを取り戻すため、自由を求めて戦うSFファンタジーです。主人公の親友は禁断の歴史を知ろうとする少年。「飛翔することは、孤独との闘いでもある。」(p. 89) といった台詞は様々なことを考えさせられます。

ここからは高校生が主人公のお話になります。『君の名は。』。映画と同時に、この本も発売されました。私自身、映画を観て分からなかった部分は、本を読んで理解できました(笑)。また、小説では一人称でそれぞれの立場から描かれているため、キャラクターの心情もよく分かります。売り方が上手だとは思いましたが、映画と小説、それぞれの良さがあると思います。RADWIMPSの音楽もかなり話題になっていますが、今の若者は「メディアミックス」と言いますか、音楽や映画、本、ゲームなど様々なものの中で育っているので、彼らにとっても手にとりやすいと思います。これだけ若者の支持がある本はやはり学校図書館におきたいし、読んでおきたいと思います。

『この青い空で君をつつもう』では、高校での3年間で描かれています。高校の美術部に所属する早季子。文化祭のテーマは「折り紙で、地球生命の誕生から未来までを描く」(p. 81) というものでしたが、企画した和志が病気で亡くなり、早季子のもとへ「未来で待っている」というメッセージと共に折り紙が届きます。その折り紙が生き物のように動くのです。ファンタジーではありますが、作者が瀬名さんですので、きちんと科学的なことが描かれています。材料工学などを踏まえつつ、繊維の持つ再生能力と登場人物の想いとが重なっていき、とても高校生らしい切ない恋の物語でした。

『ジニのパズル』は切ないと同時にパンチを食らわされるような、そんな小説でした。物語は、主人公のジニが通っているアメリカ オレゴン州の高校を退学になりかけているところから始まります。彼女が世話人の絵本作家ステファニーに、5年前の東京での出来事を語っていきます。日本の小学校から朝鮮学校に行った彼女は、金親子の肖像画を叩き落として割るなど学校の問題児です。「宇宙のゴミがそれだけ輝くことができるのなら、社会のゴミの私にも輝くチャンスがあるのかな」(p. 181)。若者のエネルギーをドンと感じ、辛くなりながらも「これが若者だ」という思い。民族の問題を超えて、ありあまったエネルギーのはけ口を求めながらも若者の姿に吹き飛ばされそうです。

ここから高校の部活小説です。『フラダン』。女子ばかりのフラダンス部に男子が入った。「ウォーターボーイズ」、「チア男子」、そして「フラダン」です。フラガール甲子園のことや、部活への取り組み方などの中に、福島原発の事がモチーフとして出てきます。慰問先の仮設住宅の人たちの思いや、東電の社員である父親を持つ高校生など、それまで考えなくても良かった友情にも亀裂が入っていくなど日常の高校生活の中に社会問題が入り込み、原発問題も実感として響いてきます。部活小説にも高校生を描きつつ、他の色々なテーマが入っているという作品も最近増えてきました。

『世界が終わる前に』。これは高校ビブリオバトル部のお話で3冊目になります。今回の作品はSFミステリー仕立てです。作者である山本弘さん自身もよくビブリオバトルをされていますが、SFやミステリーが専門でもあるだけに、本書にもそれらのタイトルがいっぱい。友情や恋愛を絡めた部活動小説としても楽しめるし、ビブリオバトルについても良く分かります。巻末には登場する本のリストが掲載されており、おススメの本が並びます。

次に外国作品から『モンスーンの贈りもの』。ジャズというアメリカの高校生が、インドで貧しい人々に出会ったことをきっかけにビジネスを始めるお話です。世界に目を広げること、自身にできることを考えること、そして実際にやってみるということについて考えさせられます。差別の問題に直面したり信頼している人に裏切られたりしながらも起業し、高校生でありながら自身ができることに挑戦する彼女の姿は、読んでみると勇気が出ます。

『エベレスト・ファイル』。ドキュメント映画製作者の筆者が、実際のエベレスト登頂を踏まえて書いているため、登頂の良い側面ばかりでなく過酷で厳しい状況も含めて的確に伝えています。「ぼく」という主人公が出会ったシェルパ族の少年。少年は登頂に同行しながら、なぜ消えていったのか。正義感や自然に立ち向かう思い、恋や友情などが描かれています。登山の危険で過酷な実態が追体験されて恐ろしい場面もありますが、これも若者ならではの物語でした。

ライトノベルから1冊紹介します。『ノベルダムと本の虫』。第13回角川ビーンズ小説大賞の審査員特別賞受賞作です。本が大好きな少女アミルが物語の王国に招かれ、「五國物語」の謎を追って戦う「ビブリオ異世界ファンタジー」です(KADOKAWAホームページより)。ノベルダムのエネルギーは活字。好きな言葉や文を「引用(クオート)」するのです。司書を「本の虫」と呼び、寮は「虫籠」、アミルは夜働くので「蛍科」に属します。途中「ペンは剣よりも強し」や「私の物語は真っ白」「だったら書けばいい」といった言葉もたくさん登場し、本当に本を好きな人が書いているのだと読み手の私も嬉しくなりました。

最後にノンフィクションを挙げました。『16歳の語り部』。3・11から6年が過ぎようとしています。津波がおそった当時、宮城県東松島市の小学生であった子どもたちが高校生となって、経験や思いを語っています。雁部那由多君は目の前で、人が津波で流されていった経験を持ち、津田穂乃果さんは家を失いました。津田さんは気持ちのはけ口がなく、中学時代は机を投げるなど乱暴な行いが止められなかったそうです。相澤朱音さんは親友を亡くし、家族同然だった犬は見つからないままです。彼らは言います。11歳とは物事をきちんと見つめ、自分の言葉で語るができる一番若い世代だと。語ることで自分が癒されると同時に、つながっていく。これは希望の書であると思います。

■授業との関連や発展させるもの

次は授業と関連付けられると思う本をあげました。『生命の始まりを探して僕は生物学者になった』は、「14歳の世渡り術」シリーズです。このシリーズはYA世代におススメです。「自分はどこから来てどこに行くのか」という疑問から行き着いた先が「辺境生物」であったと、生物学の専門的な中身はもちろんのこと、長沼さんの興味や生き方と研究が結びついて楽

しい読み物になっています。滑り台で遊んでいたときに感じたという「僕はどこから来てどこへ行くのだろう」(p. 28)という疑問や、「SFは壮大な仮説」(p. 195)といった考え方は印象的でした。

『面白くて眠れなくなる元素』。「中高校生が対象」という本ではありませんが、「読んでほしい人」に「日々のニュースなどに出てくる元素のことを知りたい人」とあります(p. 4)。確かに「セシウム」「プルトニウム」「ニホニウム」などよく耳にはするものの、詳しく説明できないことも多いのではないのでしょうか。そういった元素についても分かるよう、やさしく書かれています。授業でも習うかと思いますが、「こういう本もある」と平行して紹介すると大変参考になるのではないのでしょうか。

『14歳のための宇宙授業』。副書名に「相対論と量子論のはなし」とありますので、星や宇宙についての詳しい説明はもちろんです。が、「つまり最初の星が一生を終えたとき、その‘星のかけら’から生まれたのが私たちだということになる」(p. 227)「あなた自身の存在が宇宙を‘いま、あるように’存在させているのです」(p. 228)といった言葉など、大きな宇宙の中に自分はいるのだというロマンを感じさせてくれる本です。若者へのメッセージとしても素敵です。

『ダーウィンと旅して』。読書感想文コンクール高校の課題図書(注4)『ダーウィンと出会った夏』(2011年7月刊)の続編です。『ダーウィンと出会った夏』は、テキサスの田舎町のキャルパーニアという11歳の少女が、まるで「虫愛づる姫君」のように生物に親しんでいくお話でした。時代は1900年。13歳になったキャルパーニアは、誕生日に祖父から『ビーグル号航海記』をもらい、もっと勉強したいと願うのですが、周囲からは理解されません。「この世界では、女の子にできることは少ししかないのに、わたしの知るかぎり、お嬢さんと呼ばれるようになったら、できることがもっと少しになってしまう」(p. 117)と悩む姿が描かれます。動物がたくさん出てきて楽しく、勉強にもなります。生物の授業の際、ブックトークなどに使いたいと思いました。

『おもしろ実験研究所』は、岡山県内の科学実験グループ80人による簡単な科学実験を集めた本です。イラスト入りで分かりやすく解説し、材料は家庭用品や百元ショップなど身近に揃うものばかりなので、簡単に楽しく実験できます。小学校上級生あたりを対象としていますが、中高校生は、実験の裏にある物理や化学の法則、生物などの不思議さにも触れることができると思います。

『世界甲虫大図鑑』。今、図鑑がブームです。美しく楽しい図鑑が増えていると思います。この図鑑では、全ページで各昆虫の写真が実物大で示されるほか、地図なども掲載され、世界のどこに生息しているかもよく分かります。たくさんの虫は眺めているだけでも楽しいです。

『中谷宇吉郎 雪を作る話』。中谷宇吉郎、湯川秀樹、寺田寅彦など優れた研究を行い、素晴らしい文章も書く人々は多くいますが、そういった人々を取り上げた本は手に取られにくいと

思います。このSTANDARD BOOKSはしゃれた感じで親しみやすくなったのではないのでしょうか。雪の結晶や線香花火についてなど、科学の話は面白く楽しいです。古典とも言えるようなこれらの文章も、もっと若者に読んでほしいと思います。

社会科関係で1冊。『地図がわかれば社会がわかる』です。高校教師を40年務めた著者が、進化する地図の世界を解説。様々な地図の見方を紹介しています。世界地図を見ると紛争について分かることや、スマホの地図アプリでできること、海外の国々の呼称や映画の話など、角度を変えて地図を見ることで、「地図とはこのように楽しめるものなのだ」と世界の見方も広がる本でした。

『LGBTなんでも聞いてみよう』。他ジャンルでも紹介がありましたが、最近この言葉がよく聞かれるようになりました。この本は中高校生を対象に、質問に答える形で読みやすく書かれています。この本を書いた方々自身が色々なことで悩んできたとあり、「みなさんといっしょに具体的に「性」について考えて」いくという温かい本になっています(p.2)。巻末には言葉の説明や相談機関等の一覧も載っています。

『姜尚中と読む夏目漱石』。昨年は漱石没後100年、今年は生誕150年です。つまり、明治維新から150年でもあるのですが、そのためか漱石に関する本の出版やイベントもあちこちで行われています。姜尚中さんの作品では、個人的には『悩む力』の方が良かったかなと思うのですが、東京・新宿の漱石旧居跡に文学館ができるのも楽しみであり、漱石の関連本として本書を紹介しました(注5)。

『新聞力』。ちくまプリマー新書は、クラフト・エヴィング商會による表紙がいつも素敵だと思います。この本は、齋藤孝さんが新聞を読むことの力を具体的に書いています。ここにいらっしゃる皆さんには新聞の力を改めて申し上げるまでもないですし、私自身も毎日読んでいますが、この本を読むと「確かに」と様々な物事が再認識されます。スマホとは異なり、新聞の一面には様々な要素が含まれています。記事があり、解説もあり、書評などもあり…ということで、日常的に読んでいけば当然語彙も増え、雑談力も増し、その他様々な能力が培われます。中高校生にはこの本を薦めつつ、新聞を読むべきだということを伝えたいと思います。

『研究するって面白い!』。こちらは岩波ジュニア新書からの1冊です。これは科学者になった11人の理系女子の話で、先程紹介した『ダーウィンと旅して』同様、「少女よ大志を抱け」とも言うべきメッセージがあふれる本です。11人の女性たちがそれぞれ、自身の人生と研究分野について語っています。こんな先輩たちがいるということは力強いことですし、色々な研究分野があることを知るほか、少女たちを後押しする、道しるべにもなる1冊ではないかと思いました。

■教養(入門書として)

ここからは、授業と関連もありますが、もう少し広いテーマのものをあげています。

『憲法と君たち』。最近憲法も話題になることが増えました。この本は、具体的な憲法の条

文の話ではなく、憲法そのものの意義、なぜ大切にしなければいけないのかを若者に語りかけるように書いています。1955年に書かれたものを、木村草太氏が解説を付けて復刻しました(『憲法と君たち』復刻によせて)より。「憲法が君たちを守る。君たちが憲法を守る」(p. 3)という言葉、また日本が世界の中で先駆けて謳った「戦争放棄」について、「平和だけはちがう。～中略～ それはほかの国ぐにははまだしていないことなのだ。～中略～ 世界に向かってほこってよいことじゃないだろうか」(p. 135)といった言葉は印象的です。憲法制定に関わった著者の若者へのメッセージです。

『18歳からの民主主義』。選挙権の年齢が18歳以上に引き下げられたことに合わせて出版された本です。18歳の若者に向けてと同時に多くの人達に向けて「一緒に考えよう」と、各界および一般の人々が心を込めて、本音の部分で民主主義を語っています。選挙図示や各自のおススメ3冊なども掲載されています。「民主主義の危機が叫ばれる現在の日本。私たちの中に果たして、(哲学者である)鶴見(俊輔)さんの言う「盛り返すパワー」はあるのか？」という問いかけに始まり、「選挙はデモクラシーのすべてではありません。でも、選挙なしにデモクラシーは成立しえないんですね」(p. 171)など建前ではなく、本音で伝えたいという人々のメッセージが一杯詰まっています。

『はじめての哲学』。この本では、14人の哲学者の人生をたどりながらその思想を学んでいくので、彼らの考え方を具体的に理解できます。哲学者たちに対する親しみも湧き、名言にも「なるほど」と理解できます。ソクラテス「自分の無知を知っている」、デカルト「我思う、故に我あり」、ダーウィン「自分の好きなことに没頭する」。生きる中で培っていった思いや考え方が、それぞれの思想となっていくということがよく分かります。ヨシタケシンスケさんの絵がより親しみを感じさせます。

『谷崎潤一郎文学の着物を見る』。昨年、東京・本郷の弥生美術館で同テーマの催しがあり、それが本としても刊行されました。(注6) 谷崎の小説の中に出てくる衣装が並べられているのは、何とも言えない不思議なあやしい空間でした。『細雪』の4人の着物の違い、『痴人の愛』のナオミのマント、しゃれた着物の着こなしなど。文学、服飾、芸術の素敵なコラボです。

岩波新書からの1冊で『ブラックバイト』。個人的にはこのような本もジュニア新書に入れても良いのではないかと考えています。インタビューなどを元に、主に学生の不当労働の実態が具体的に紹介されており、若者の責任感、優しさや無知を逆手に、ほめたり脅したりして縛り付けている様子が赤裸々に報告されています。よく話題にもなるテーマですが、明るい未来だけでなく、こういう現実もあるのだということをしっかり伝えたいと思います。

『アウシュヴィッツの囚人写真家』。表紙は縞模様の服を着た囚人の写真。この作品は、その写真を撮った写真家ヴィルヘルム・ブラッセの体験を元に小説化したものです。ブラッセは写真家の誇りをもって仲間の囚人たちの死の直前の姿を、最高の写真として残そうとしました。彼はどのような思いで写真を撮ったのか。ブラッセの職業意識と、繰り返されるアウシュヴィッツの惨状の数々。様々な角度からホロコーストを捉えた作品はありますが、本書も秀逸です。

『戦争まで』。『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社、2009年刊）の続編とも言える本で、加藤陽子さんが昨年高校生を対象とした講義をまとめたものです。高校生たちが様々な疑問をぶつけ、それに加藤さんが答え一緒に考えていくという作りになっています。先の大戦に至るまでの節目節目の決断は、どのようになされていったのか。内容は少し難しいかもしれませんが、高校生の質問にも答えているので語り口は難しくありません。高校生たちについて「就職、受験、友人・家族との別れなど、大きな岐路を前にして日々を送る存在ゆえ、その緊張感ゆえ」（p. 4）真摯に考えているという言葉は、まさにその通りだと思いました。

■人生を考える

『ぼくは君たちを憎まないことにした』。これもイチオシの本です。昨年、フランスのパリで同時多発テロが起き、130人以上の犠牲者が出ました。その中に、筆者の妻も含まれていました。この本は、その日からほぼ2週間ほどのレリスさんの生活や想いを綴ったものです。事件から3日目にFacebookに投稿した文章が世界中の感動を呼び起こし、この時の文がこの本のタイトルとなっています。ぼくが君たちを憎むということは君たちの思うつぼだ。そうはさせない。憎しみの連鎖を断つということを考えさせられます。これは愛の本です。

進路を考える生徒たちに、『司書になるには』。「なるにはBOOKS」も学校図書館に揃えたいシリーズの1つです。2015年の学校図書館法改正を受けて、改題改訂版が出されました。（初版：『司書・司書教諭になるには』、2002年刊）司書だけではなく、司書教諭や学校司書の仕事、その違い、実際の仕事などが分かりやすく書かれています。

伝記も生徒たちに読んでもらいたいジャンルですが、中高生に適したものが「ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉」が刊行されるまで少なかったように思います。悩み戸惑い、失敗しながらも自分の人生を切り開いていった先輩たちの姿は、大きな励ましになるでしょう。その中から、『クマのプーさん』の翻訳などで知られる『石井桃子』。菊池寛の家でのアルバイト、「プーさん」との出会い、山本有三や吉野源三郎たちとの出会い、『ノンちゃん雲に乗る』の執筆、かつら文庫の開設など、児童文学に関わって生きた人生は私にもとても楽しいものでした。

『夜を乗り越える』。芥川賞受賞作の『火花』が現在NHKでも放送されています。

「火花」も読み応えがありましたが、本書ではありのままの又吉さんの姿、想いが書かれていて胸にひびきます。少年時代の自分や文学との出会い、「本当はこんな人間ではない」という思いから「なぜ本を読むのか」に続き、本の紹介に移っていきます。本が彼を救っていったことがよく分かり、共感しながら読める作品になっています。

『心にひびくマンガの名言 第2期1』。マンガも1つのジャンルとして、学校図書館にもなじみのあるものになってきました。マンガにもこんなにも多くの作品があって、良い言葉がたくさんあるのだということが分かります。図書館などに置くために作られた本だと思いますが、願わくはもっと安く、ポケットに入るものにしてほしいと思います。

『シャクルトンの大漂流』。中高生たちは絵本なども大好きです。南極探検に出かけて遭難

し、それでも1人の犠牲者も出さず生還した人たちの記録の絵本です。シャクルトンの本は、これまでも何冊も刊行されていますが、絵本として描かれることで置かれた状況や持ち物、行動などもよく分かります。各自の仕事を大切にしていたことや、音楽などに親しんでいたことも。巻末の「わたしは仲間たちとともに死線を乗り越えて生きることを選んだ。未知の世界へ乗りだす冒険を求める心は、人間の本能なのだ」と信じている。たったひとつの真の失敗とは、そもそも冒険をしようとしなかったことだ」という言葉はとても印象的です。

ヨシタケさんの絵本は若者にも人気です。その中から『このあとどうしちやおう』。この本は、おじいちゃんが死んじゃったと言うところから始まります。「このあとどうしちやおう」とは、おじいちゃんが残したノートのことです。そのノートを見て「ぼく」はわくわくしますが同時に、楽しそうに見えたおじいちゃんが、実はさみしかったんじゃないか…など色々なことを考えます。そして自分も「このあとどうしちやおう」と考えるうちに、「いま」を考えるようになるのです。

■話題の本

最後に、話題になった本の中から4冊紹介します。まず『ハリネズミの願い』。これは、今年度の全国高校生ビブリオバトル大会のチャンプ本でした(注7)。ひとりぼっちのハリネズミ君は手紙を書きます。「親愛なるどうぶつたちへ ぼくの家にあそびに来よう、キミたちみんなを招待します。～中略～でも、だれも来なくてもだいじょうぶです。」(p.6)友だちが欲しいのに、あれこれ考えて手紙が出せません。この本はまるごと1冊ハリネズミ君の妄想です。友を求めながらも傷つくのが怖い…その複雑で繊細な心。人間に普遍的な、特に思春期に共通した思いです。そんな思いに寄り添った本です。

『文豪ストレイドッグズ 4』。コミックス原作者による小説版の第4弾です。横浜近海を「航海する島」スタンダード島を舞台に、テロリスト集団と探偵社の中島敦、国木田独歩、芥川龍之介たちが戦います。トラになる中島敦君、すぐ自殺したくなる太宰君など、これを読んで文豪たちの本に手を伸ばす子も多いようです。横浜や堺などでスタンプラリーもにぎわっていました。

『ツバキ文具店』は鎌倉を舞台にした物語です。ポッポちゃんと呼ばれる鳩子は祖母から受け継いだ文具店で代書屋をしています。別れた恋人に、未練ではなくただ元気になっているかと問うだけの手紙を出したい。借金を頼まれた相手に嫌な気持ちを持たせないような断りの返事を書きたいなど、ポッポちゃんは依頼者の気持ちに寄り添いながら、便せんから筆記用具、切手まで考えて1通1通手紙を書くのです。ほっこりと心が温くなる小説です。

『アンマーとぼくら』。有川浩さんは、中高校生に最も人気のある作家の一人です。「アンマー」とは沖縄の言葉でお母さんのこと。義理のお母さんへの親孝行のために帰った沖縄での3日間を描かれます。実の母への思いから素直になれなかった少年時代、父への複雑な思いも丁寧に書かれています。「アンマーとぼく」ではなく、「ぼくら」がミソ。沖縄料理もたくさん出てきて、沖縄に行ってみたくくなります。有川さんらしいユーモアやファンタジー性もあります

が、この作品は彼女の新天地かなとも思います。ジワーと涙がこみ上げてくる作品です。

これからも若者の心に寄り添いながら、質の高い本を若者に届けていきたいと思っています。
ご清聴ありがとうございました。

(於：株式会社図書館流通センター 2017年3月6日・7日)

※本図書リストおよび講演録の無断転用・複製は固くお断りいたします。

注

1) 2016 IASL TOKYO

<http://iasl2016.org/ja/>

最終確認日：平成29年5月1日

2) 21世紀 活字文化プロジェクト 「全国高等学校ビブリオバトル」

http://katsuji.yomiuri.co.jp/biblio_h/entry/2016.htm

最終確認日：平成29年5月1日

3) 公益社団法人 全国学校図書館協議会 「第62回学校図書館調査」の結果」

<http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html>

最終確認日：平成29年5月1日

4) 公益社団法人 全国学校図書館協議会 「過去の課題図書 第51回～第60回(2005年度～2014年度)」

「第58回コンクール(2012年度) 高等学校の部

<http://www.j-sla.or.jp/contest/youngr/pastbook/515320052007.html>

最終確認日：平成29年5月1日

5) 新宿区 「新宿区立漱石山房記念館」

https://www.city.shinjuku.lg.jp/soshiki/261000bunka_01_01_02.html

最終確認日：平成29年5月1日

6) 弥生美術館 竹久夢二美術館 「過去の展覧会」

「耽美・華麗・悪魔主義 谷崎潤一郎文学の着物を見る ～アンティーク着物と挿絵の饗宴～」

http://www.yayoi-yumeji-museum.jp/yayoi/exhibition/past_detail.html?id=640

最終確認日：平成29年5月1日

7) 読売教育ネットワーク

「ビブリオ高校生大会決勝」

<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/biblio/contents/post-564.php>

最終確認日：平成29年5月1日